

幼稚園と男性教師

由井正人

① はじめに

小学館発行の「幼児と保育」の一、二月号に男性保育者について書かれていた。たまたま「幼児の教育」に男性教師について書くことになっていたので、興味深く読ませていただいた。

それによると、初めて男性保育者が誕生したが、昭和四十三年であったという。同じ頃（四十二年）私も幼稚園教師として勤めはじめた。

長野県では、当時としては幼稚園の男性教師はめずらしいものであったようです。ようですと書いたのは、私

自身学校に勤めていたので、子どもと共に過すのは当たり前であり、特に幼稚園だからと言ってどうこう感じなかったからです。それ以後、本園ではずっと男性教師になっています。以下、本園の様子を紹介しながら、男性教師についてふれてみることにする。

② 本園と男性教師

本園には、在職年数に差はありますが、今までに五十名の教師が子どもたちの指導に当たっています。その中で二十二名が女性ですが、五名を除き全て非常勤講師と呼ばれている職員である。この五名も新卒で採用さ

れたのであり、男性教師のように県内の小中学校から転任してきたのではない。即ち附属幼稚園の男性教師は公立学校の教員がなったのであり、ここが他県の附属幼稚園と違う、本県の教員人事の特殊性があると思う。

③ 附属と教員人事

前述のように、男性教師は県内の小中学校で数年から十数年経験して附属へ転任してきます。したがって公立学校の教職員であるが、書類上附属に在る間だけ文部教官となり、三年―四年勤めてまた市町村の小中学校へもどるのです。

県内十数郡市から推せんされた中から一名―二名しか本園には来れませんので、各郡市の推せんも男性が中心になっていることが、男性教師が多い原因のひとつであると思います。

さらに、教育学部の学生が、毎年六月中旬から八月まで、夏休みをはさんで六週間の教育実習を行います。実習期間中は、朝七時から夕方七時三十分まで指導をしま

す。七時半に学生を帰し、その後職員会、研究会、明日の準備等にかかりますので、帰宅が十一時、十二時になるのは普通です。

そんな様子を先生方はよく知っていますので、勢い男の先生の推せんが多くなってしまふのでしょう。

また、附属の使命のひとつに、実践研究と保育の公開があります。子どもたちの動きを追い、それを分析するのに相当な時間がかかります。ある時は、ひとつの動きに二時間もかけて話し合うこともあります。そんな訳で、研究会も遅くなるのが実状です。家庭を考えると、推せんはどうしても男の先生になってしまふように思われます。

したがって、長くいてもらうことも無理ですし、附属でつけた力を郡市にもどって発揮してもらいたいのです。こんな訳で、長くても四年しか在職しませんから、幼稚園経験のある人が、どうしても少なくなってしまう。そこは、研究の継続、引きつぎなどによりカバーしています。

五十八年度は、左のような学級編成でした。

学 級	担 任	副 任
つくし組	塩 沢 崇	○二木淑江
たんぼぼ組	○宮 入 靖	○鈴木香奈
すみれ組	○小林賢一	
う め 組	萩原啓治	○奥谷季世子
さくら組	天田藤雄	

年度末にこの内五名の職員が移動しました。(○印)小林先生は出身地の小学校の理科専科に、宮入先生は、市内の中学校へ、副任の三人の先生方は結婚で退職されました。

④ 学級編成 (五十九年四月)

こうして、五十九年度は、県内の小学校から両市川先生と三人の講師の先生を迎えてスタートしました。

学 級	男子		女子		計	担 任	副 任
	人数	人数	人数	人数			
三歳児(つくし)	10	10	20		20	天田藤雄	一志理恵
四歳児 (たんぼぼ)	16	18	34		34	市川俊一	浅井久美子
	17	18	35		35	塩沢 崇	
五歳児 (う め)	16	19	35		35	市川伸人	滝沢佳子
	18	18	36		36	萩原啓治	
さくら	18				18		

担任は全て男性教師ですが、副任として女の先生がどのクラスにもかわれるようにしています。即ち子どもたちは、お父さん先生とお母さん先生にみてもらえるというわけです。

副任は、以前は各クラスに一名おり、いわゆる複数担任であったのですが、国の財政上の理由から現在のようになり三名になってしまいました。内一名は園独自の費用でお願いしています。副任は、ふたつのクラスをもってありますが、保育材(単広とか主題といわれるもの)の切れ目や長期休みなどをひとつの節として交代していません。

⑤ お父さん先生

子どもたちは、男性教師をどう感じたのでしょうか。

たまたま本園の一期生、浅井久美子先生が勤めておりますので、語ってもらいました。

「私は、五歳児より附属幼稚園に転入し、大きく変わったことの一つに、今迄の園では担任の先生が女の先生であったのが、男の先生と女の先生二人になったということです。女の先生に対しては、それまでと変わりなく

「優しいな」という印象を持っていた様に思いますが、そこで私に大きく衝撃的な存在となったのは、男の先生でした。はじめは、「あれ、わたしのおとうさんとはちがう、こわそうだな」という気持から、優しくいつもニコニコして私たち子どもをそっと包んでいてくださったその先生にも、何かやっばり近づき難いものがあつた様に思います。しかし一緒にあそぶ中で、そんな不安もすぐに解消していきました。

そんな中、私は一つの壁にぶつかりました。それは、

今見るとどうってことのない土手なのですが、そこから降りることの出来ない私を発見したのです。先生のあとをついて他のお友達は、どんどん坂を駆け降りていきます。一人取り残こされ、戸惑う私。ちょうどおべんとうの音楽が鳴りはじめ、焦りと不安が更に大きく私にのしかかってくる、すくんでいた足が、ますます前へ進まなくなってしまうのです。坂の下では、私の名前を呼ぶお友達。お昼の音楽は大きくなるばかり。一步降りようとして二歩下がりそんなことを繰り返していました。

男の先生は、お友達に囲まれながらも変わらぬ優しい笑顔で坂の下で私をじっと見ていて下さり、一言「頑張れ」とおっしゃったきりでした。笑顔は変わらなくともその眼差しには、厳しさと私に寄り添って一緒に坂を降りてくださろうとした優しさがあつた様に記憶されています。そんな厳しさと優しさに支えられ、勇気を与えられ、やっとの思いで坂の下へ駆け降りることができたのです。直接手を差し伸べずに長い間待っていて下さつたこと、その父の様な寛大さが、私に勇気をそして

優しさの中の厳しさを教えて下さったように思います。坂を見る度、子どもたちと駆け降りながら、感謝と共に、あの頃を思い出すのです。」

⑥ ダイナミックな男性教師

本園の男性教師の一番の利点は、前述したように全て小学校教師の経験を積んでいることである。即ち、小学校では何年生がどんな内容を扱っているか、実際に指導してきているのでよくわかっているということです。

したがって、幼稚園で今やっている子どもたちの遊びや活動が、やがて小学校のどの教科にどんな領域や内容として結びつき、関連していくのか、そして幼稚園も含めて八年間ないし九年間の成長を見通すことが容易にできるということです。

また、しらかば林に登り、幹に太い丸太をしぼりつけたり、なわばしごをつるしたりダイナミックな対応ができるのも子どもたちに活動の幅をもたせてやれるようです。

さらに道路に面したフェンスの近くにつるつる山とよんでいる土の築山があります。粘土質の頂上に水をくみ上げ、水泳パンツで子どもたちと泥あそびをしている男子教師を見ていると、そのダイナミックさは、子どもにとって魅力のようです。

⑦ 男性教師と女教師

もう一度浅井先生に、今度は男性教師と共にやっている立場から語ってもらいました。

「四月、子どもたちは多くの不安と期待を胸に登園してきます。安定した家庭の生活から、新しい環境に足を踏み入れようとしている子どもたちにとって、幼稚園へ来ても、家庭と変わりなくお父さん、お母さんが居てくれる。そんなお父さん役が男の先生のような気がします。」

四月より十八年前に、私自身がお世話になったこの園で今度は、保育する者として勤務させて頂いています。十八年前私が男の担任の先生から体験したことを、今また、組ませていただいている先生より改めて感じています。

す。やはり女としての視野、持ち得ている感覚の域では、気づかないこと、できにくいこと（具体的にはまだはっきりとはしていませんが、厳しさを持ちながら、寛大な心で見守っていく、待ってみる、又、冒険させてみる等）を自然な姿で子どもたちに浸透させていく。やはり今の私にとっても魅力です。そんな男の先生から、教えていただく毎日です。そして「女性ならではの」の部分も培っていきたいと思っています。」

⑧ おわりに

いろいろと書いてみましたが、私たちは、子どもたちにとつて、お父さんお母さんにはなれませんが、なつてはいけないと思います。父親のような厳しさをダイナミックさ、母親のようなやさしさや細やかさのある先生であってほしいのです。お互いのよさで補いつつ、子どもたちの成長をうながしていきたいのです。教育の場には、男性教師も女性教師も必要です。子どもたちには、両方の先生がいてやりたいのです。



（信州大学教育学部附属幼稚園）